

木村修一前理事長 記念講話録

MELON が活動をはじめた頃の顔ぶれはいつの間にか大きく変わっており、はじめから理事だった方は数えるほどとなってしまいました。設立時に副理事長だった5つの組合の代表者の名前も、顧問として駒口盛さんと西条典雄さんが残っているだけで、事務局も現役で残っているのは事務局長の齋藤昭子さんだけということを見て、過ぎ去った14年の月日は短かったといえないことを今改めて感じます。

MELON の設立からまる14年経ちましたが、理事長の役を辞すに際して、悩んだり、喜んだり、考え込んだりしながら MELON の運営に関わってきた年月を思い起こし、思いつくままに私の考えを正直に述べるのが、今後の MELON の中核となっていく皆様にとって少しでも役立てばと考え、このような形で話をするをお引き受けした次第です。

(1) MELON の歩みを振り返って

いうまでもなく、地球の環境悪化を憂い世界から集まった人々の総意から生まれた「地球サミット」での合意に基づいて、宮城県でも市民レベルでこの運動を展開していこうと設立されたのが MELON でした。これまで宮城県のくらしや環境をよくしようと努力してきた「みやぎ生協」「JA 宮城中央会」「宮城県漁連」「宮城県森連」「日専連宮城県連」が中核となり、環境を考えるさま



1993年6月5日 MELON 結成総会



1993年3月2日 呼びかけ人会

ざまな市民団体、そして研究者、法律家、企業家などの専門家、さまざまな領域に属する個人、さらにはこれに賛同する企業などが相集まって、1993年の6月5日に設立されました。設立の記念講演をいただいた加藤陸奥雄先生の、金華山の鹿の話などを交えた、生態学からみた環境を守る話しを思い出し、それがついこの間の出来事のような感じがいたしますが、14年という年月は生まれた子どもが中学生になる年月ですから、考えてみるとそんなに短い期間ではないことを認識させられます。

ではこの間、MELON はどれだけ成長したのだろうか?と、これは常々考えさせられたことで、いったいどれだけ進歩したのか思い悩むことが多かったのですが、多くの会員の持続的な活動によって、最初に目標とした方向に着実に歩みを進めてきたことをいま改めて肌で感じています。それぞれの分野で活躍している方々が理事・評議員となっていることもあって、運営のやり方にそ

れが反映されているせいか MELON の活動はユニークなものが多く、ジェンダーの視点から生協の活動を分析している昭和女子大の大学院の博士論文（文部省の助成で単行本となっている）の中にもとりあげられています。もちろん一般会員のボランティア精神がこの運動のエネルギーであり、MELON を支える会員の努力に感謝したい気持ちでいっぱいです。しかし最も単純でしかし進歩を示す「会員の増加」という点では、なかなかいい結果がでず、毎年反省させられる事項でした。もっと多くの人々に知ってもらい、入会していただくことができなかつたことについて理事長として責任を感じております。メンバーを増やすことは今後の重要な目標にさせていただきたいと思っております。

MELON 設立の 1 つの目標は、この運動を持続するために子どもや孫たちに引き継いでいく組織にしたい、そして我々の主張を国や自治体などの政策や行政にまで届けたい、つまりそのための提言ができるような組織にしたいということでした。そのために、MELON の法人化はやはり重要な活動だったと思います。

法人化はたしかに功を奏したと思います。例えば川口環境庁長官が仙台で市民対話を開催するについて、県からの依頼で私が宮城県の状況を知る立場で、長官と壇に立ったことがありました。また、京都議定書に基づいて各都道府県に地球温暖化防止活動推進センターを設立することが決まっ



2007年6月16日
「第12回 MELON 会員と市民のつどい」会場準備を手伝うボランティア



たとき、宮城県知事よりそのセンターの実質的活動を MELON に依頼したいという要請がまいりました。しかしこの時私はこれにどのように対応すべきかは MELON にとって大変重要なことと考え、MELON は県の外郭団体のような「県の下請けをする機関でないこと」「MELON の主体的な方針を堅持した上で、共同歩調をとれるところは一緒にやりましょう」という態度で、直接に知事からお願いがあれば引き受けることを確認して臨んだのでした。このようにして知事との対話がビデオやカメラを持ったメディアの中で行われたのでした。環境関連の委員の就任が行政機関から要請されることも、現在では稀ではない状態になりましたし、市や県に対して意見書を出すこともしばしば行うことができるようになり、政策提言ができるような組織になったことは、それだけ MELON が成長し、認知度があったことを示していると思います。

MELON の活動が次第に認められてきたのに大きく貢献したのは、上に述べたストップ温暖化センターみやぎ（宮城県地球温暖化防止活動推進センター）の活動の外にも「緑・食部会」「水部会」「企業&環境プロジェクト」「ごみ減量プロジェクト」「エコシティ仙台プロデュースプロジェクト」等々ユニークな活動をやっている部会・プロジェクトの活動があると思います。



1999年3月13日 「地球温暖化とその防止について考える - 私たちの取り組み、そして温暖化防止活動推進センターのあり方とは -」

(2) MELON の活動の特徴

MELON の特筆すべき性格として「みやぎ・環境とくらし・ネットワーク」は、「環境」と「くらし」を標榜するように生活の中から環境をよくする実践の活動をしていこうという視点を持っていることだと思います。事実水の問題にしても、酸性雨、水資源、森林保護、そして河川から海までいずれもくらしと密着したところから調査・研究が行われています。

エネルギー問題では、自然エネルギーの検討とともに、いかにしたら電力や石油エネルギーを節減できるかを知るため「環境家計簿」を作り出したり、日常的な生活のなかでゴミ問題を取り上げ、余分な包装紙を減らす日専連や生協の地道な運動は人々に環境問題を考えさせる機会にもなっていると思います。

さらに地元のサッカーチームであるベガルタ仙台や野球チーム楽天の球場を舞台に、ごみの分別から割り箸のリサイクルなどにいたるまで、ごみの削減と環境美化を取り上げての積極的でユニークなごみ削減運動は MELON が意図していた方向性を多くの市民に示す役割を果たしています。紙コップ削減のためののタンブラーを世に出すなど、夢のある形で運動をもちあげているのは微笑ましくもあります。私たちの主張する「くらし」とは「みやぎのくらし」であり、私たちの街や村の生活を考える視点をも含んでいるはずです。



ユアテックスタジアム仙台で使用されているタンブラー



フルキャストスタジアム宮城で使用されているマイカップ



2007年6月24日 田んぼの学校

里山に囲まれ、水田の多い農村を持つみやぎの農山村や太平洋に面した漁業を営む地域での環境問題を考えていこうという視点からの取り組みも MELON の運動の中にみられるもので、ごく自然であり、「田んぼの学校」で子どもたちに自然環境を学ばせる運動もそこから発生しているわけで、頼もしい限りです。

そして私たちの子どもや孫にこの運動を伝えていくという MELON の最初からの目標は、子どもを対象とした教育的な視点をもった運動を持続的に行うということに対応しており、これは MELON にとって重要なことで、子どもの参加できる山や川、あるいは渡り鳥などの観察会や調査を組織し、さらにこれらの資料を子どもたちの読みものに編集し、学校での環境学習の副読本になっているという実績は MELON としても誇るべきことだと思っています。子どもたちに環境をテーマにした演劇を見せることができるユニークな仲間を含めて、上に上げた地道な活動を組織できるすばらしい人材が MELON にはたくさんいることは、理事長としてとても心強いものでしたし、本当に嬉しく思ったことでした。そして今後もこのような「みやぎのくらし」に根ざした多彩な運動を展開できる私たちの組織を大切に持続して行ってほしいと思います。環境の問題は生活のあり方、生活のスタイルも問われるものであり、さらに踏み込んだ提言ができるよう、MELON の中でもさらに議論する必要があると思っています。

(3) 国際的規模で考えなければならない環境問題

日本の食糧自給率が 40%であることは誰でも知っていることですが、このことが環境問題と深く関わっていることに、もっと世間が関心を抱いてほしいと思います。

その 1 つが水の問題です。食糧を輸入していることは、それに費やされる水を外国に依存していることとなります。穀物を 1 トン作るに要する水は 1,000 トンです。日本は現在 640 億トンの水を外国に依存していることとなります。アメリカだけでも 380 億トンです。日本はこれだけの水を利用する能力を現在持っていません。洪水調整用のダムの水量が 24 億トンですが、水田は 81 億トンを持っています。いったん休耕田となると再生は非常に難しいことが憂慮されています。

世界の水不足は深刻になりつつあります。黄河はほとんど断水で、北京はあと 30 年経つと生活できないとされています。アメリカの穀倉地帯も地下水が下がり、30 年後には危機に瀕するといわれています。



日本の農業をどうするかは環境と密接な関係があり、国際的な食糧問題と関係があることを知るべきと思います。

そしてもう 1 つが輸入食糧からくる窒素の過剰問題ですが、時間の都合上ここでは省きます。

(4) 今後ますます重要さを増す MELON の役割



20 世紀はサイエンスがすばらしい発展を遂げた世紀でした。石油・石炭を用いた大量生産―大量消費の時代を作り出し、先進国では昔の王様のような便利な生活をするのができ、よき時代の到来を喜んだのでした。

ところが、それは大気汚染をもたらし、その汚染のスケールは次第に膨れ上がり、気候の変動にまで影響して、海水面を変える勢いで進行するなど、まさに地球環境を変えることを人間が認識した時代ともなったわけです。しかも悪いことに、この科学を戦争の武器製造に応用し、極めて強力な破壊力と殺傷力を持ったものを作り上げることになりました。戦争による地球環境の破壊はさらに激しいものとなり、20 世紀には戦争は地球規模で環境を破壊することも知った不幸な世紀でもあったといえます。「地球サミット」の宣言は、これに立ち向かう人間の知恵を示すものに他ならないのです。

21 世紀はその修復の世界であると期待されているのですが、中東その他の戦争はなかなか終わりそうにありません。それどころか、日本の最近の動きは、再び戦争に参加する方向に向かっているのではないかとさえ思うこのごろです。

20 世紀に犯した人間の愚かさを修復する時代にしようとする人々の願いが「地球サミット」の精神だと思っています。MELON は小さいながらその担い手の 1 人であるという自覚をもち、前進すべきだと思っています。MELON の今後の活躍を期待して話を終えたいと思います。

